

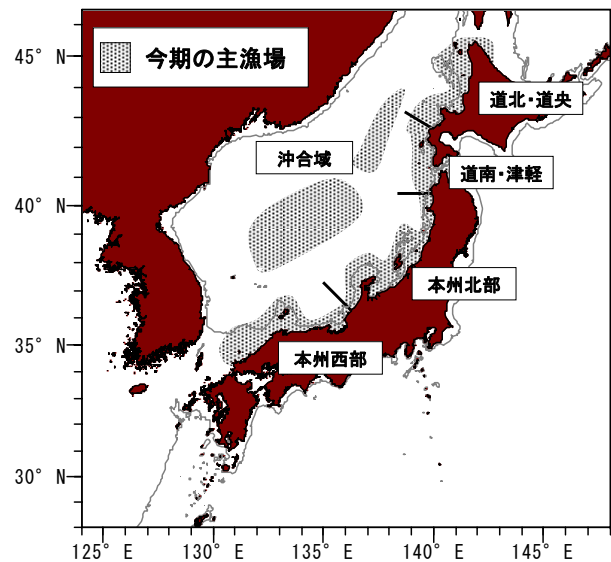
平成19年度第2回日本海スルメイカ長期漁況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し独立行政法人水産総合研究センター
日本海区水産研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(2007年8月～12月)

対象魚種：スルメイカ
対象海域：日本海
対象漁業：主にいか釣り漁業
対象魚群：主に秋季発生系群

- (1) 来遊量：
昨年および近年平均より少ない。
- (2) 漁期・漁場：
北部（道北・道央、道南・津軽）が中心。
沖合域は低調だが、10月以降に回復。
- (3) 魚体の大きさ：
小型が多い。特に沖合で小型。



※「近年平均」は最近5年間（2002年～2006年）の平均を示す。

問い合わせ先

水産庁 増殖推進部 漁場資源課 沿岸資源班

担当：大隈、田中、佐藤

電話：03-3502-8111(内線6800)、直通電話：03-6744-2377、ファックス：03-3592-0759

当資料のホームページ掲載先URL

<http://www.jfa.maff.go.jp/release/index.html>

独立行政法人水産総合研究センター 日本海区水産研究所 業務推進部

電話：025-228-0451、ファックス：025-224-0950

当資料のホームページ掲載先URL

<http://abchan.job.affrc.go.jp/>

<http://jsnfri.fra.affrc.go.jp/index.html>

参 画 機 関

北海道立中央水産試験場	鳥取県水産試験場
青森県水産総合研究センター	島根県水産技術センター
秋田県水産振興センター	山口県水産研究センター
山形県水産試験場	長崎県総合水産試験場
新潟県水産海洋研究所	社団法人 漁業情報サービスセンター
富山県水産試験場	水産庁 増殖推進部 漁場資源課
石川県水産総合センター	独立行政法人 水産総合研究センター
福井県水産試験場	北海道区水産研究所
京都府立海洋センター	東北区水産研究所
兵庫県但馬水産技術センター	日本海区水産研究所

平成19年度第2回日本海スルメイカ長期漁況予報

今後の見通し（2007年8月～12月）

対象魚種：スルメイカ

対象海域：日本海（道北・道央、道南・津軽、本州北部日本海、西部日本海、沖合域）

対象漁業：主にいか釣り漁業（中型いか釣り、小型いか釣り）

対象魚群：主に秋季発生系群

1. 道北・道央（小型いか釣り）

- （1）来遊量・漁況：昨年および近年平均並み。
- （2）漁期・漁場：道央では8～9月に昨年および近年平均をやや下回る。
- （3）魚体の大きさ：道北は8月まで近年平均より大きい。

2. 道南・津軽（小型いか釣り）

- （1）来遊量・漁況：昨年および近年平均並み。
- （2）漁期・漁場：10～11月にもピークが見られる。
- （3）魚体の大きさ：前半は近年平均より小さい。

3. 本州北部日本海（小型いか釣り）

- （1）来遊量・漁況：昨年および近年平均より少ない。
- （2）漁期・漁場：活発な漁場形成は見られない。
- （3）魚体の大きさ：近年平均より小さい。

4. 西部日本海（小型いか釣り）

- （1）来遊量・漁況：昨年および近年平均より少ない。
- （2）漁期・漁場：10月頃は下回る。
- （3）魚体の大きさ：近年平均より小さい

5. 沖合域（中型いか釣り）

- （1）来遊量・漁況：昨年および近年平均より少ない。
- （2）漁期・漁場：10月以降に回復が期待される。
- （3）魚体の大きさ：近年平均より小さい。



* 道北・道央（宗谷～後志）、道南・津軽（渡島、檜山、青森県）、本州北部日本海（秋田県～石川県）、西部日本海（福井県～長崎県）、沖合域（日本海中央部）

** 近年平均は最近5年間（2002年～2006年）の平均を示す。

I 漁況予報

2007年の6月までの漁況の経過、日本海スルメイカ漁場一斉調査の結果、および冬季発生系群を主体とした太平洋での分布状況（平成19年度第1回太平洋スルメイカ長期漁況予報）を主要な情報として今期の各海域における漁況を予測した。

1. 道北・道央（小型いか釣り）

道北・道央海域では通常、7～8月と10～11月に漁獲量のピークがある。前半は秋季発生系群が主対象であり、後半は冬季発生系群が主な漁獲対象となる。本年は魚群の移動が早く、6月の漁獲量は昨年および近年平均を上回った。漁場一斉調査結果では、今年の当海域への来遊量は近年平均を下回るものの、道北では昨年を上回った。

今期の漁況は、昨年および近年平均並みと予想されるが、道央では8～9月に昨年および近年平均をやや下回る。魚体の大きさは、道北では8月までは近年平均より大きい。

2. 道南・津軽（小型いか釣り）

道南・津軽海域では例年7月が漁期のピークであり、年によっては10～11月にもう一つの小さなピークが出来る場合がある。本年6月の漁獲量は昨年および近年平均を上回った。漁場一斉調査結果では、今年の当海域への来遊量は近年平均並みであった。

今期の漁況は、昨年および近年平均並みと予想される。また、10～11月にも漁期のピークが見られる可能性が高い。魚体の大きさは近年平均より小さい。

3. 本州北部日本海（小型いか釣り）

本州北部日本海域では漁期の中心は5～7月であり、8月以降にこの海域での活発な漁場形成は通常見られない。本年は魚群の移動が早く、5～6月の漁獲量は昨年および近年平均を下回った。漁場一斉調査結果でも、今年の当海域への来遊量は昨年および近年平均より少なかった。

今期の漁況は、昨年および近年平均を下回ると予想される。魚体の大きさは近年平均より小さい。

4. 西部日本海（小型いか釣り）

予報対象期間の西部日本海では、10月以降に産卵のために南下する来遊群が漁獲の主対象となる。

6月までの漁況は、5月を除き、昨年および近年平均を概ね上回って推移した。漁場一斉調査結果では、今年の当海域への来遊量は近年平均並みであったが、沖合域における来遊量は昨年および近年平均を下回った。特に沖合域の大型の個体が少なかった。

今期の漁況は、10月頃を中心に近年および昨年を下回る。魚体の大きさは近年平均より小さい。

5. 沖合域（中型いか釣り）

沖合域では主に大和堆付近の海域で7～9月を中心に漁場が形成される。漁場一斉調査結果では、沖合域の来遊量が少なく、特に沿海州南部沖で顕著に少なかった。魚体も大型の個体が少なかった。

今期の漁況は、昨年および近年平均を下回る。特に9月までの漁況は低調と予想される。しかし、10月以降は漁況も回復すると期待される。魚体の大きさは、前半は近年平均より小さい。

II 日本海漁場一斉調査結果の概要

1. 分布状況

日本海における 2007 年のスルメイカ（秋季発生系群）の分布状況を日本海漁場一斉調査（6 月下旬～7 月上旬に実施）によって調べた。調査結果の概要は下記の通りであった。

< 海域別分布状況（図 1） >

- (1) 道北海域では CPUE（釣機 1 台 1 時間あたりの採集個体数）が 20 個体前後の比較的分布密度の高い海域があった。平均外套背長は 19cm 台であり、近年平均よりも大きかった。
- (2) 道央海域では CPUE が 30 個体を越える調査点もあったが、多くは 5 個体前後であった。平均外套背長が 17～18cm 台であり、近年平均よりも小さかった。
- (3) 道南・津軽海域では CPUE が 20 個体前後の調査点が多かった。平均外套背長は 19～20cm 台または 17～18cm 台であった。
- (4) 本州北部日本海の CPUE は 10 個体以下が多く、分布密度は低かった。平均外套背長は 17～18cm 台であった。
- (5) 西部日本海では CPUE が 20 個体前後の比較的分布密度の高い調査点も見られた。平均外套背長は 17～18cm 台であり、近年平均よりも小さかった。
- (6) 沖合域では CPUE が 20 個体以上の調査点も見られるが、大型の個体が少なく、殆どの調査点で平均外套背長は 19～20cm 台であり、近年平均よりも小さかった。沿海州南部沖では CPUE が 5 個体以下の調査点が多く、分布密度が特に低かった。

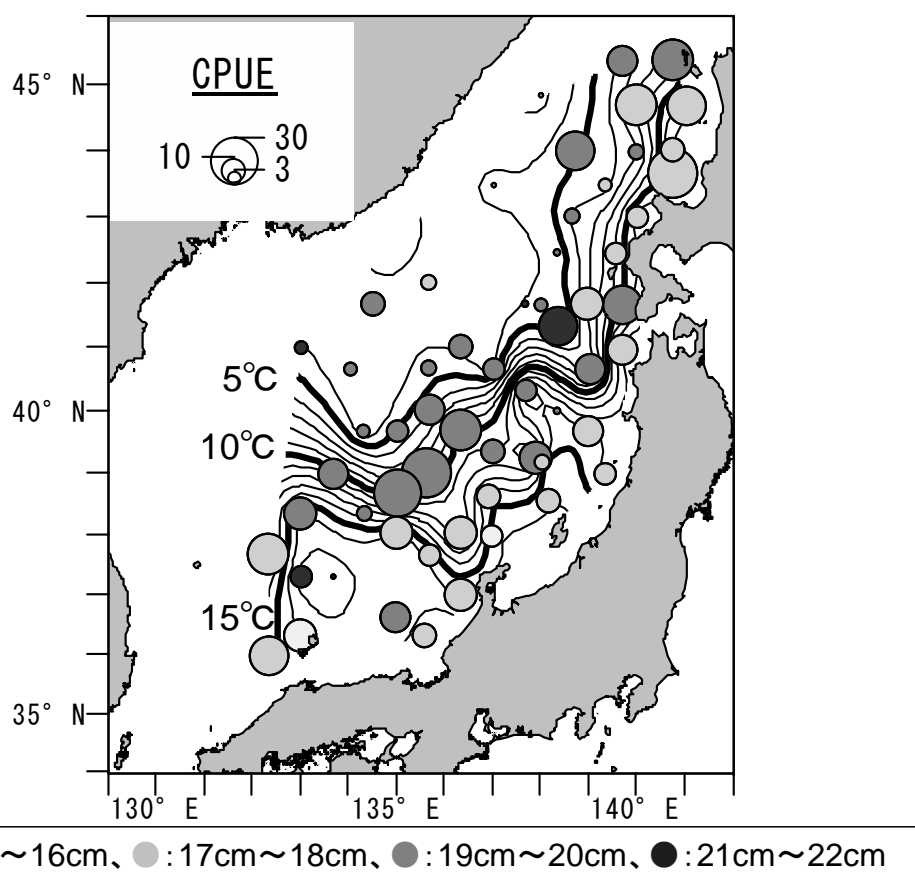


図 1 日本海におけるスルメイカの分布状況

●の面積は各調査点の分布密度の指標となる CPUE（釣機 1 台 1 時間あたりの採集個体数）を示し、色は平均外套背長(1cm 階級)を示す。水深 50m の水温分布も合わせて示した。

<外套背長階級別分布状況（図2）>

- (1) 外套背長 17cm 未満の個体（主に 1 月生まれ）は、例年同様水深 50m の水温 15℃以上の海域および道北沿岸域に広く分布し、昨年よりも多かった。
- (2) 外套背長 17～18cm 階級の個体（主に 12 月生まれ）は、例年よりも調査海域全体に広く分布する傾向があった。昨年と比較すると本州北部日本海で少なかったが、道北海域で多かった。
- (3) 外套背長 19～20cm 階級の個体（主に 10～11 月生まれ）は、例年同様、亜寒帯前線以南に広く分布しており、道北海域では昨年よりも多かった。
- (4) 外套背長 21～22cm 階級および 23cm 以上の個体（主に 10～11 月生まれ）は、例年亜寒帯前線以北の冷水域で見られるが、昨年および近年平均より少なく、特に外套背長 23cm 以上の個体の分布密度が著しく少なかった。

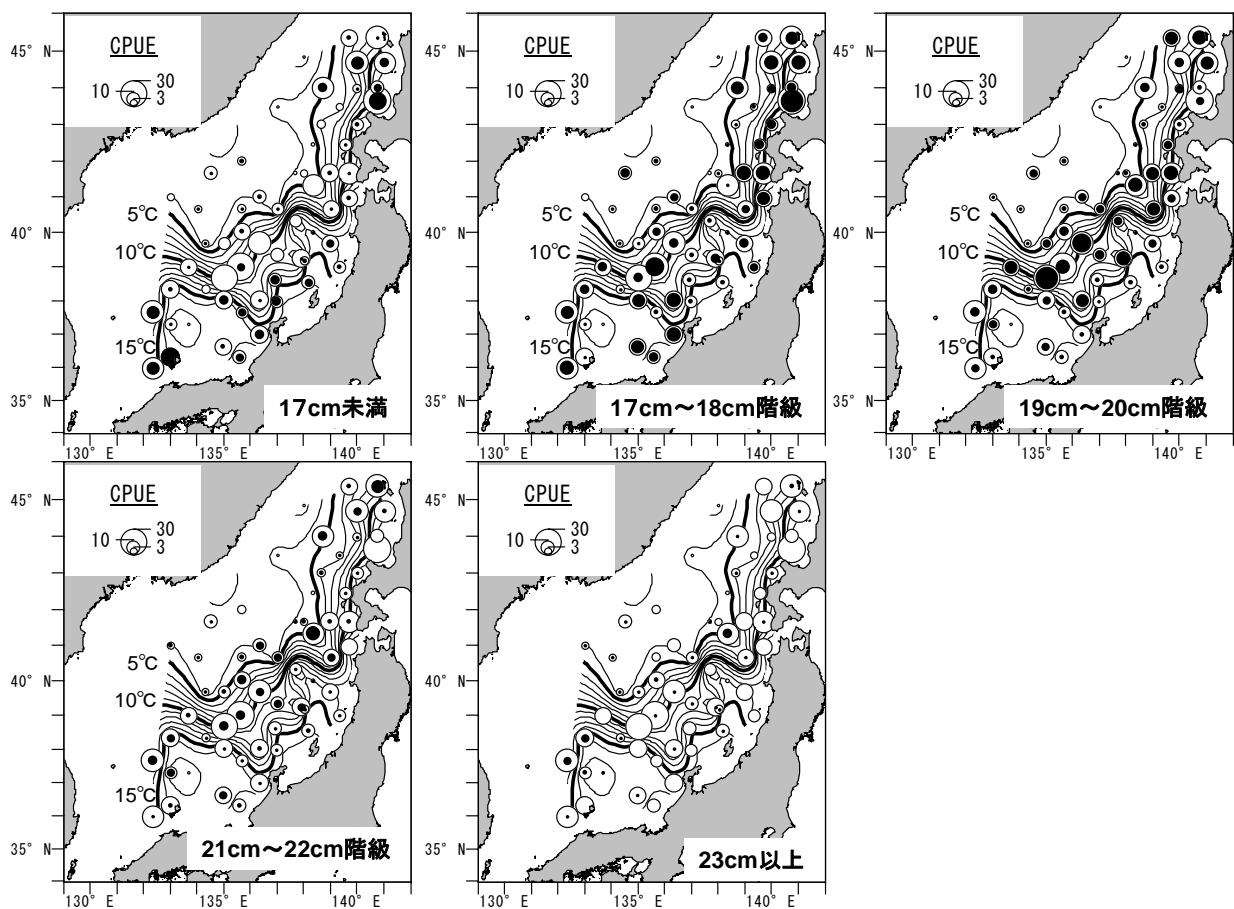


図2 外套背長階級別 CPUE。○が各調査点の CPUE、●が外套背長階級別の CPUE を示す。水深 50m の水温分布も合わせて示した。

2. 資源水準

釣獲試験を行った全調査点の平均 CPUE（釣機 1 台 1 時間あたりの採集個体数）を日本海におけるスルメイカ（秋季発生系群）の資源量指数として用いた。資源量指数の過去 30 年間の変化傾向として、1970 年台と 1980 年代は減少傾向・中～低水準であったが、1990 年代は増加し、中～高水準になった（図 3）。なお、2000 年前後は高水準を維持していたが、近年は減少傾向にある。

2007 年の資源量指数は 11.18 個体であり、昨年（15.80 個体）の 71%、近年平均（17.21 個体）の 65%

であった。したがって、今年の日本海におけるスルメイカの資源量は昨年および近年平均を下回ると判断される。なお、過去30年間の平均値（12.54個体）をやや下回る水準（89%）であった。

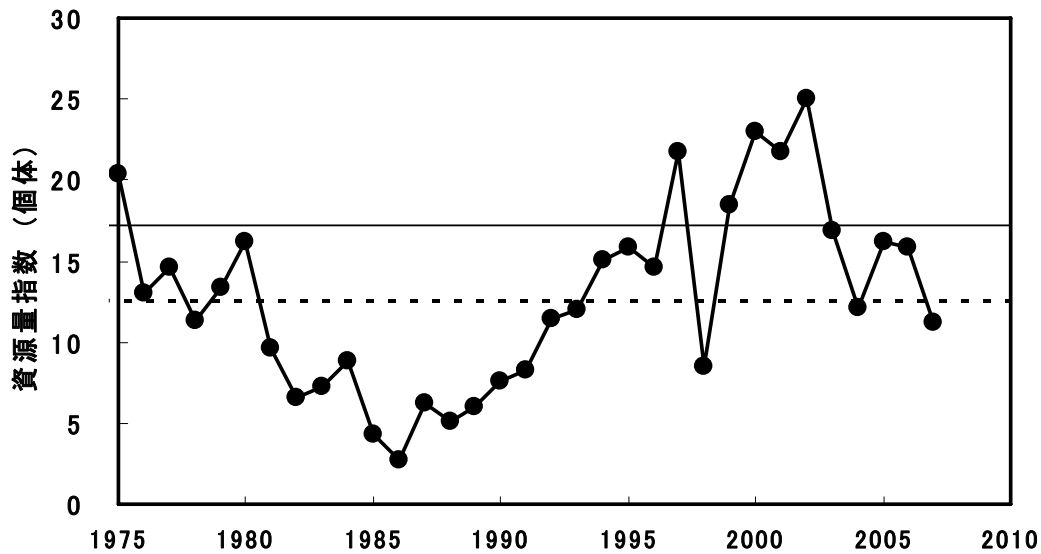


図3 スルメイカの資源量の指数の変化

細線は近年平均（17.21個体）、点線は30年平均（12.54個体）を示す。

3. 魚体の大きさ

各調査点の分布密度（CPUE）で重み付けした平均外套背長組成を図4に示す。2007年は外套背長20cm階級以下の分布密度はほぼ昨年および近年平均と同様であった。しかし、外套背長21cm階級以上の分布密度は昨年および近年平均を大きく下回り、資源量指数を引き下げる要因にもなった。

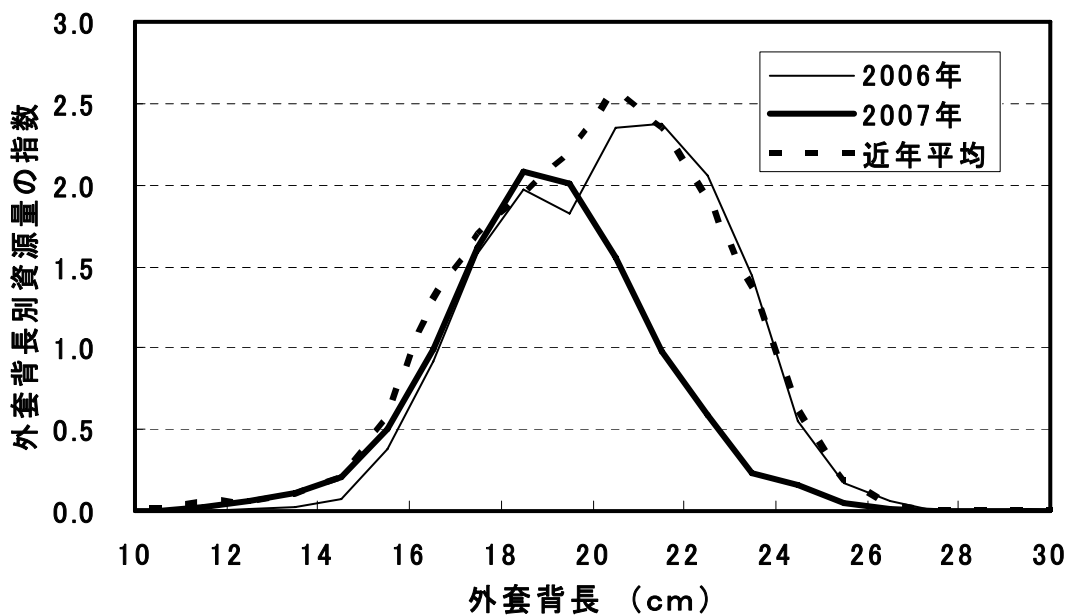


図4 日本海漁場一斉調査結果によるCPUE重み付け平均体長組成
各外套背長階級の値は釣機1台1時間あたりの平均採集個体数を示す。

Ⅲ 2007年6月までの漁況の経過

今年（2007年）は水温が高く、魚群の移動が早かった。そのため、5～6月の本州北部日本海（石川県～秋田県）では昨年および近年平均を下回ったが、道南・津軽海域および道央海域では昨年および近年平均を上回った（図4）。一方、西部日本海は5月を除き、昨年および近年平均を概ね上回った。海域ごとの要約は下記の通りである。

- (1) 道央および道南・津軽海域では、6月の漁獲量が昨年および近年平均を上回った。
- (2) 本州北部日本海では、昨年および近年平均を下回った。
- (3) 西部日本海は5月を除き、概ね昨年および近年平均を上回る漁獲量で推移した。

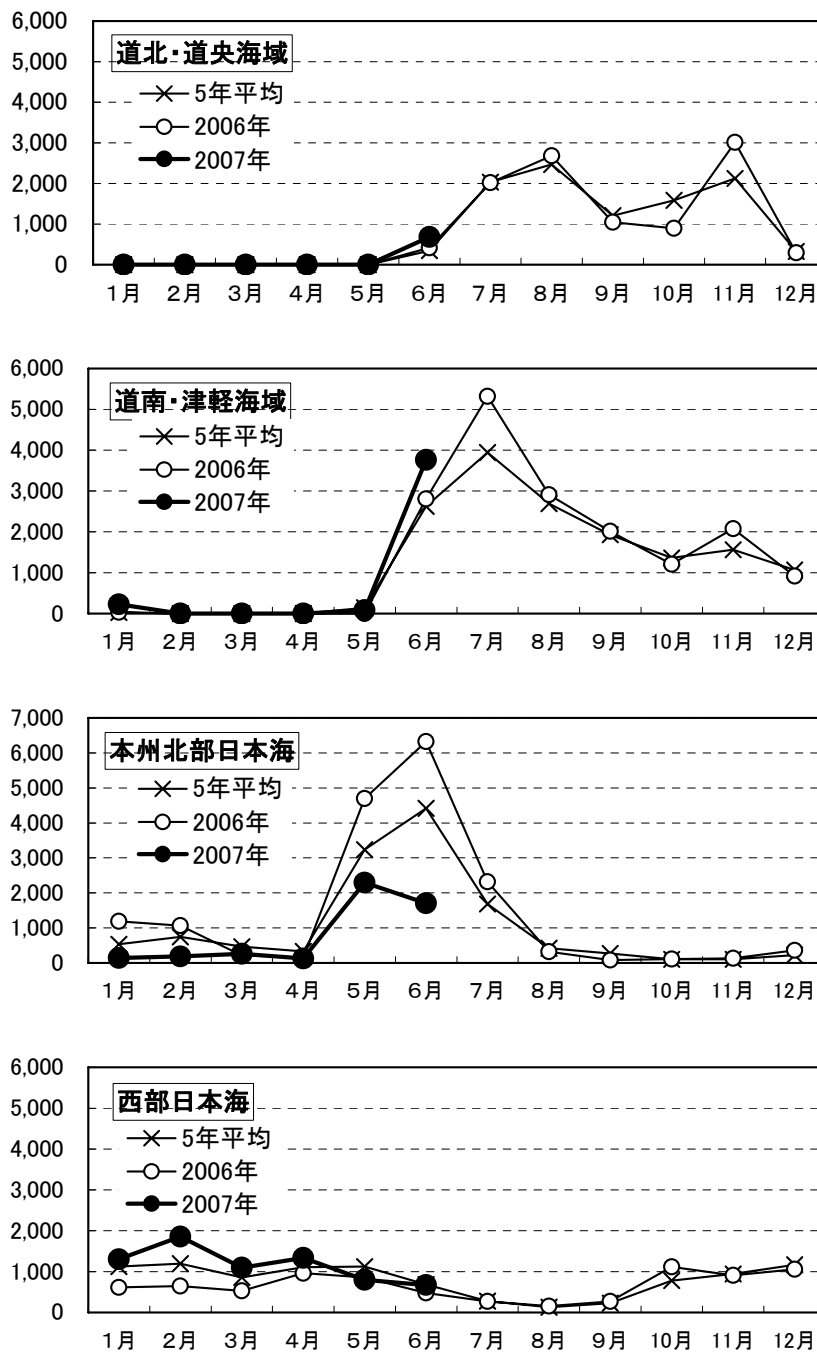


図4 日本海各海域の生鮮スルメイカの漁獲量（トン）
各道府県試験研究機関資料より作成。

IV 太平洋側（冬季発生系群）の分布状況

太平洋側には主にスルメイカ冬季発生系群が分布する。これらは10月以降、宗谷海峡および津軽海峡を経由して日本海に來遊する。そのため、太平洋側の冬季発生系群の分布状況は10月以降の日本海の漁況に深く関係する。

平成19年度第1回太平洋スルメイカ長期漁況予報では、道東および道南で2006年を大きく上回る來遊量が予想されている (<http://www.jfa.maff.go.jp/release/19/071302.pdf>)。